



渡辺 ^{れみ}麗心 さん

●佐野小学校 6年

わたしの野球で子どもたちに夢を

わたしの将来の夢は、女子プロ野球選手になることです。

わたしには、5歳上の兄と姉がいます。その兄と姉が野球をしていたので、わたしも自然と野球を始めました。わたしが所属していた野球クラブは女の子が一人しかいませんでしたが、だれにも負けたくないという強い思いをもち続け、一生懸命努力してきました。中学校に入学しても野球部に所属し、女子プロ野球選手になるという夢をかなえるために努力を続けたいと思います。

そして、子どもたちに夢や希望を与えられるようなプロ野球選手になりたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの
メッセージ



本市の市民栄誉賞受賞者である石井琢朗さんが打撃コーチを務めている広島東洋カープが、25年ぶりにセ・リーグ優勝を果たしました。球団の松田オーナーの元へお祝いの電話を入れましたが、今年の優勝は石井コーチの指導のおかげだとの言葉をいただき、自分のことのようにうれしく感じました。日本一を目指すカープの戦いを、皆さんで応援しましょう。

さて、スポーツの秋です。先月11日には市民体育祭の陸上部門が運動公園で開催されました。多くの市民に各支部の代表としてご参加いただきましたが、大会の準備や円滑な進行にご尽力いただいた体協各支部、競技役員の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。現在、本市は「スポーツ立市」推進の一環として、スポーツ・リズムに取り組んでおります。これまでの高校駅伝や石井琢朗杯野球大会など「関東」クラスの大会が開催されてきたほか、クリケットの国際大会や合宿が旧田沼高校グラウンドの「国際クリケット場」などで開催され、外国人を含む多くの選手・関係者が本市を訪れております。今後もクリケットをはじめ、さまざまなスポーツを活用し新たな人の流れを作りたいと思います。

先月から各地域で敬老会が開催されています。本年度、本市で100歳を迎えられる方は男性1名・女性21名であり、100歳以上の方は総勢68名で、最高齢者は106歳の女性の方です。毎年100歳の方々に慰問しておりますが、今年も皆さんの笑顔にお会いできることを楽しみにしております。

実りの秋、収穫の秋です。これからそば祭りや秋祭りがあちこちで開かれますが、夏の疲れを癒やしつつ、皆さんもスポーツ、読書、旅行など秋本番を楽しんでください。

岡部正英

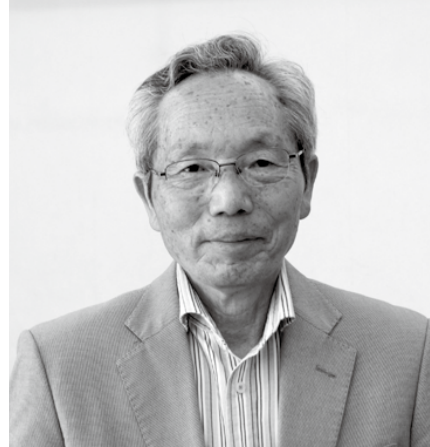
今回の表紙 「第12回市民体育祭」 9月11日(日)運動公園陸上競技場



11日に行われた市民体育祭・陸上の部では、男性・女性・子ども各10人・総勢30人の代表により綱引きが行われ、力を合わせ、綱を引きあいました。

今月号では4・5ページで「スポーツ立市」についての記事を、26ページに「市民体育祭の様子」を掲載しています。ぜひご覧ください。

海老原 脩治 さん
(田沼下町)



○プロフィール

地元・佐野高校、早稲田大学卒。
栃木県庁などに勤務。
安蘇史談会の一員として、また、
町会長として活躍中。



歴史をひもとく町会長

4月初旬から5月にかけて、城北地区公民館で、郷土史を中心に歴史を研究する会「安蘇史談会」の発表がありました。今回ご紹介する海老原さんは、そのメンバーとして積極的に参加されています。

安蘇史談会は、会長である京谷さんのほか会員50数名。先程述べた発表会のほか、年に一度、城北地区公民館を中心に活動しているサークルの連絡協議会で発表があるとのこと。さらに会員の研究成果を発表する会報「史談」を年一回発行しており、海老原さんはその編集長を務めています。

海老原さんは、栃木県庁を退職後、県社会福祉協議会に勤務。その頃から安蘇史談会に参加されたそうです。大学の専攻は教育学部。歴史には以前から興味があり、古美術研究会に属し、関西方面に仏像の拝観、調査などを実施。高校時代は地歴クラブで、自転車で平泉まで行かれたこともあるとか。

安蘇史談会の歴史講座では、海老原さんの親戚の方が関わった「竹橋事件」(西南戦争の後、政府からの恩賞が少なく、近衛兵が天皇に強訴したことで処刑された事件)や「江戸時代の安蘇郡

の鷹場について」、さらには戊辰戦争の栃木版ともいえる「梁田戦争」などについて発表を行いました。

郷土史をいろいろな視点から熱心に研究している海老原さんですが、現在は、田沼下町の町会長をされています。この「広報さの」の配布や地域の祭り、道路掃除や、各種行事への企画や参加・運営などにあたっています。

県職をおやめになった後も、地域活動に関わる海老原さん。その積極的な姿勢を私たちも見習いたいものです。

(市民記者 福田 満)



研究の成果を発表する海老原さん



こおろぎの鳴き声は、お坊さんの
経文を唱える声に似ていた？

8月から10月にかけて鳴くこおろぎは「秋鳴く虫」の総称として、昔から広く知られていました。こおろぎの鳴き声が文字化されたものとみると、コロコロコロコロ・キリキリキリキリなどいろいろです。聞く人の主観によって、鳴き声はさまざまな文字で書き表わされています。こおろぎといえば、普通えんまこおろぎのことで、コロコロと鳴くといわれています。

こおろぎは、きれいな声で長々とよどみなく鳴き続けます。昔の人は、コロコロという鳴き声を聞いて、お坊さんが左肩から右脇下へと袈裟(衣の上にまとう法衣)をかけて、経文を唱えている声のように感じました。そこでこおろぎを、ケサカツカ(ケサガツカ)というようになりました。

ケサは袈裟の意。カツカは、こおろぎの鳴き声コロコロコロコロとなり、それがさらに変化したものです。「秋」なつて、日が暮れかかると、田んぼのアゼッコ(あぜ道)やミチツバタ(道端)のクサパッコで、ケサカツカがコロコロコロコロ鳴いてるよ」

カツカという音から、カカ・ハハ(母)を連想し、ケサハツハ、ケサガハハという方言も使われるようになりました。虫の鳴き声も聞きよう、考えようによって、いろいろな方言が生み出されるものですね。ところで、これらの方言の使用中心地は旧安蘇郡(田沼・葛生)で、明治生まれの人たちが使った古い方言です。明治以降はほとんど使われなくなってしまうました。

(市民記者 森下喜二)

